

専門分野を持たないで研究する方法 —— 黄土高原生態文化回復プロジェクト

安富 歩

「専門は何ですか」

という質問にすぐに答えられない研究者が増えている。情報学環のスタッフは特にその傾向が強い。そのなかでも、私くらい専門が言えない人間はいないだろうと自負している。この質問を受けるといつも一瞬絶句してしまうのだが、最近は勇気を出して、

「専門はありません」

とすることにしている。

専門なしで研究をするには、プロジェクトを軸に組み立てざるを得ない。何かあるプロジェクトを推進し、そのために必要なことを全て学び、そこで生じる事態の全てについて考える。この場合、専門が何か、ということは問題にならない。

専門を前提として研究を行なう場合、共同研究といっても同じ専門のメンバーが集まることになる。一方、プロジェクトを推進する場合は、同じ専門の人を集めてもしょうがないので、できるだけさまざまな専門の人を集めることになる。この場合、専門知識よりも、相互に心を開いて創造的にコミュニケーションができるかどうか鍵になる。

私の経験では、自分の専門分野についての深い知識を売り物にしている人は、その専門の枠を出て、自分が知らないことについて意見を言うことを恐れるか、あるいは逆に、専門以外には恐ろしいくらい無知蒙昧であったりするので、「使えない」ことが多い。自分の専門分野を極めた上で、それが嫌いな人がプロジェクトに参加するには向いているように思う。

また、プロジェクトを推進する上で重要なことは、目的・計画・責任という概念を放棄することである。目的を固定したり、計画を立てたり、責任分担をはっきりさせたりすると、コミュニケーションの流れが悪くなる。言うならばプロジェクトの進みたいほうに進ませるしかない。

私が情報学環で推進している「黄土高原生態文化回復プロジェクト」を立ち上げたときには、以上のようなことを意識していたわけではない。流れのままに、なんとなく始まったに過ぎない。

中国西北部一帯に広がる黄土高原は、二千年前には草原と森林が織りなす光景が広がっていたが、徹底した開墾の結果、現在ではまとまった森林のほとんどない黄色い大地となっている。

春になるとこの大地を数千万の農民が耕し、舞い上がった土が強風に吹かれ、いわゆる「黄砂」となる。大阪外国語大学の深尾葉子助教授（情報学環客員助教授）はこの地域の村落で、十数年にわたってフィールドワークを展開しており、このプロジェクトはその知識と人脈を基盤として成り立っている。

我々は世の中が、複雑に織り上げられたコミュニケーションからできている、というごく当たり前の前提から出発し、地域や村の人々のリズムや生活にできるだけ寄り添って、「いきあたりばったり」の聞き取りや参与を行なっている。その動き方の特徴は、調査の目標や計画をあらかじめ立てずに、地域の人々がつくりだす動きのなかで、「波乗り方式」と自称する手法で活動する点にある。「援助者／援助対象」という二分法を排除し、あくまで相互に影響を及ぼしあう主体として、参加者が対象社会に与える影響を認識し、同時に対象社会から参加者が影響を受けることを活動に組み込んでいる。このようなアプローチを我々は「共生的価値創出」と呼んでいる。

情報学環は2004年3月にこの地域の唯一の大学である榆林学院とパートナーシップ・プログラムを締結し、これに基づいて榆林学院は「黄土高原生態文化回復センター」を設立した。2005年3月には同学院の苗潤才学長が東京大学に花田学環長を訪問され、榆林で行なっているプロジェクトの理念と実践について、意見交換を行ない、重要性を確認した。

過去三年の成果として最も重要なものは、小清水式自然浄化法による糞尿処理装置の導入である。これは好気性発酵によって糞尿を短期間かつ安価で有機液肥に転換する技術である。私たちは有限会社DGC総合研究所と青木電器工業株式会社との協力により、榆林学院に第一号機を設置した。

我々はパックテストを用いた簡単な水質調査を実施し、この地域の農村の水が化学肥料と合成洗剤によって著しく汚染されていることを発見した。そこで日本大使館の草の根無償援助「都市糞尿処理・農村飲料水改善プロジェクト」を米脂県婦女連合会に導入し、同県県域に糞尿処理装置第二号機を設置するとともに、農村部の二百箇所の井戸について三回の水質調査を実施し、この発見を立証した。

榆林地区は民間主導による緑化活動が盛んなことで知られている。緑化活動の中心人物は老植林技師朱序弼氏である。この方は植林のすばらしい技術を持つとともに、人をそそのかして緑化活動をさせる力がある。我々はそういった緑化団体の連絡を保ち、国際的な協力を作り出すために「黄土高原国際民間緑化文化ネットワーク」を立ち上げた。この活動が評価されて、朱氏は榆林地区の共産党書記の訪問を受け、地元テレビ局でその人生と実績を回顧する番組が作成されるなどの反響があった。

我々は文化資源の回復を生態系の回復と同様に重視している。その一環として最も成功したのは、2004年1月におこなった、北京在住の日本人カップルの婚礼を、革命以前の伝統的な陝北農村の様式で行なう、というイベントであった。当日、花嫁を運ぶ輿を、47年ぶりに復活させた村

人たちは、強い自信と満足感に輝いていた。この婚礼の様子は新聞テレビで広く報道され、特に、西北大学の寸劇事件とその後の反日デモによって対日感情の悪化していた西安では、『西安晩報』の一面にカラー写真で大きく報道された。

現在進行中の活動は、まず定方正義教授（工学院大学）を中心とした脱硫石膏を利用した内モンゴル土壌改良プロジェクトに協力し、西北地区のアルカリ土壌の調査と有機肥料を用いた緑化技術の確立を目指している。また、荒川忠一教授の紹介により、小型風力発電機のトップメーカーであるゼファー株式会社の協力により、同社の開発した新型発電機を2005年12月に榆林学院に設置した。同時に、坂村健教授を中心とする学環のユビキタスCOEと協力し、黄土高原の村のバーチャル・ミュージアム構築を目指している。

このようなプロジェクトを推進しているは、「専門はありません」としか答えようがない。しかし、それでも研究はできるのである。



安富 歩（やすとみ あゆむ）

[専攻領域] なし

[著書・論文]

『複雑さを生きる』（岩波書店、2005年）

『貨幣の複雑性』（創文社、2000年）

『「満洲国」の金融』（創文社、1997年）

[所属] 東京大学大学院情報学環／総合文化研究科

[所属学会] なし